

道宣の修道觀

安 重 詰

贊寧の『宋高僧伝』によると

撰法門文記広弘明集統高僧伝三宝錄羯磨戒疏行事鈔等二百二十余卷

と述べ、道宣の撰述書は二百二十余卷であるとされる。^①し

かし、現在大正藏經には二十部百十卷がおさめられている。

各書物はそれぞれ特徴をもっているが、特に、信仰修道を強調するものとして『淨心誠觀法』二巻本がある。本書は実践的な仏教を論じていると見られ、道宣の修道觀を眺めるには欠かすことのできないものであると考えられる。そこで、この『淨心誠觀法』によって道宣の修道觀を探って見たいと思う。

本書の内容は三十章に分けられるが、第二十五章までは煩惱諸垢を対治して身心を淨める自利の行を示し、次の四章は大乗利他の行を述べている。最後の一章は三学を修して身心を淨め、道行を成じ轉じて衆生を教化すべきことを強調している。

本書の初めに淨心を説いて

淨心者、於汝現行煩惱諸部過患、教修対治令汝即時随分解脫。垢染漸滅。心転明淨。發生定慧。起於大乘清淨信心。趣向菩提種性住。^②

といっておる。つまり、『淨心』とは、消極的には五停心觀を修して六識心を淨め、現行の煩惱塵垢をほろぼし、心を明淨ならしめ定慧を起さしむることであり、積極的には大乘清淨の信心を起し、利他の大行に向うことであるといっている。

道宣は一切の苦の原因を明かし

一切苦因果財色為本。……八万四千障道罪業悉因財色以為根本。^③

といっておる。すなわち、一切苦の因果は財色によるものであり、八万四千の障道の罪業も悉く財色の為であるという。

觀行を重視し禪觀による実践修道を力説しながら財色の問題を取りあげるのは何故であろうか。それは本書の最後の三十一章に

今時末法衆生心薄背恩絶義^③

といつて、道宣は末法という言葉を用いて、当時の社会仏教界を批判しておる。つまり、僧団が本来果たすべき使命感を忘却した為に社会における指導的位置を失なっていくことを痛感しておる。本文の中に

口清心濁^④：外現威儀：屏処造過^⑤

と述べ、修行する者が一切の苦の因果である財色に溺れ、道に迷っていると慨しておる。それゆゑにこの二種の財色を能く断ずる者が菩薩行であり、真の特戒であり、真の仏弟子であるといつておる。それでは、このような財色の執着をなくす為にはどのような方法を取ればよいのであろうか。そこに對しては

自知欲情多、一向観不淨…自知瞋恚多、一向修慈悲…等^⑥

と述べ、五停心観法を修すれば財色の二種を断ずることができると明らかにしておる。さらに入道する者ならば大小乗を問わず、すべて、この観行を修すべしといつておる。

出家菩薩と戒律の關係については

仏教新受戒者五年学律、然後学經

と述べ、新学菩薩は出家して五年間は小乘律を学び、その後は大乘經の説く菩薩戒を学すべきであるといつておる。しかし、

此五部律同一毘尼大藏、文相広博卒難悉識今欲知者財色為宗、能

道宣の修道観（安）

断財色即名奉律^⑦

と述べ、律藏は文相広博して知り難いものであるが、要するに財色を断ずるをもつて宗となすのであるといつておる。従つて、財色を断ずることが奉律であつて、その奉律によつて定慧を發生し、聖道を成就するといつておる。

次は三藏に関するものであるが、經律論を論じて

文字浩博寄心無所：今時愚人竟求於名不求於法、法尚不可著、何況著文字、法離文字

と述べ、さらに偈頌では

凡是諸經律 甘露亦毒藥 解服百疹瘡 不消病發作 知法不向心 解經行軋薄^⑧

と説き、經典の文字或は法そのものに執着してはならないといつておる。

ところが、このように修禪を積極的にすすめながらも文字を無条件に無視棄捨することを敢しく誠めては第十九章の偈頌に

雖觀文字空 要須遍読經 広尋聖者義 般若漸得成

と述べておる。これは禪を指向するものが經字を簡単に輕視する可能性の有り得ることを警戒しているものと見られる。

さらに、同偈頌に

雖觀諸行空 对塵修五停 貪癡結使断 寂滅心安寧 雖知三諦空

知諦義窮微

道宣の修道観（安）

七地大菩薩 不名無煩惱 金剛心滅後、然証無為道^①といつて、禪をきわめることによって高められて行く悟りの境地を明らかにしておる。

僧尼の破戒に当るものとしては

所謂 奴婢 財宝 田宅 金銀…上好の三衣 飲酒食肉…等^①

と述べておる。従つて、此等に貪求愛着し積聚する僧侶を禿居士袈裟をきた賊或は成仏の性のない一闍提、生死の種子等といつておる。このように、道宣は修道或は戒律上において非常に厳格な立場を取つておる。

利他の問題を取りあげては

先自行道然後化他他即信伏、自造惡行教他作善信用語者無有是處^②と述べておる。つまり、他人を教化する為には、まず自分身の万善の徳行が先行すべきであり、そうなれば、自然に他人の教化が成就すといつておる。それで、利他こそ自利になる道理を説いて

利他令衆生淨信反資己身成三真業。明知利他還是自利^③

と述べ、この利他の因をもつて当に仏果を成ずべしといつておる。

よく知つていながらも実践修道の少ないことを厳しく指摘しては

今時學者意見差殊迭相是非。破他自譽…欲得広知不欲広行^④と説いておる。そこで、積極的に実践することをすすめる

誠に依つて行を起せ、一生に徹せずとも貴きは快行するに在りて快読するに在らず、手に執り眼にみて宜く応に涙を垂るべし^⑤と述べ、積極的に実践することを強調しておる。さらに、同学及び衆生を教化救済することを説いて

成汝道行既自知已転教同学及余智者^⑥。

と述べ、衆生教化に最善を尽すべきことをいつておる。以上のように『浄心誠観法』における道宣の修道観は、観行による実践的な仏教を強調した点に特徴があると考えられる。

1	大正五〇	七九〇下
2	同	四九 八一九下
3	同	四九 八二〇上
4	同	四九 八三三中
5	同	四九 八二六上
6	同	四九 八二〇中
7	同	四九 八二二上
8	同	四九 八二一中
9	同	四九 八二七中
10	同	四九 八二二中
11	同	四九 八三一下
12	同	四九 八三一下
13	同	四九 八三三下
14	同	四九 八三三下
15	同	四九 八三四上
16	同	四九 八三四上

△キーワード▽ 道宣、修道観、浄心誠観法

（大正大学大学院）